

# 10-15 世紀東ユーラシアにおける錢貨流通

三 宅 俊 彦

はじめに

1. 研究の範囲
  2. 東ユーラシアにおける出土錢の事例
  3. 流通する錢貨の特徴
  4. 東ユーラシアにおける錢貨流通モデル
- おわりに

は じ め に

本論考では、中国と周辺地域における錢貨流通の様相を考古資料から復元し、それぞれで流通していた錢貨の種別や比率を比較することで、各地の特徴を抽出する。そして、中国本土及びその錢貨流通の影響下にあった沿海州やモンゴルなどでは、大錢が一定程度流通していたが、中国錢をいわゆる「渡来錢」として受容し、独自の錢貨流通圏を構築した日本、ベトナム、インドネシアなどでは銅の小平錢（一文錢）のみが使用されていたことを示す。

さらに明らかにされた各地の考古資料の特徴をもとに、当時の東部ユーラシアにおける錢貨流通のモデル化を試みる。これにより各地で発見される考古資料としての出土錢を、東ユーラシアの錢貨流通の中に位置づけて理解することが可能になると考える。このモデルを利用して出土錢を理解する試論として、北海道を含む北東アジア地域の事例を検討してみたい。

## 1. 研究の範囲

本論考であつかう範囲は、方孔円形の銭貨が使用された地域である。そこには中国や日本、ベトナム、インドネシアなど、銭貨を貨幣として使用した地域はもちろん、副葬品や装飾品として銭貨を経済外の目的で使用した地域も含まれる。

こうした銭貨が考古資料として出土する地域は中国のみならず北東アジアから東南アジアまで、非常に広範囲におよんでいる。それらの地域をここでは便宜的に「東ユーラシア」と呼んでおきたい<sup>(1)</sup>。

また本論考で検討する時期を、おおむね10世紀から15世紀としたい。この時期は、中国では北宋から明の前半に相当する。宋代は中国において銭貨が大量に鑄造され、貨幣として経済活動を支えていた。周知のように、その銭貨が元代以降大量に国外へ流出し、日本をはじめとする周辺地域で銭貨による経済が本格化する<sup>(2)</sup>。これら中国で鑄造された銭貨が周辺地域へ流出し、受容されてそれぞれ独自の経済圏を形成する状況を、考古資料から解明することが本論考の目的となる。

その後15世紀半ば以降、明で私鑄銭が横行するようになり、撰銭が発生する。その影響はほどなく日本やベトナムに波及し、各地で撰銭が行われるようになる。この時期の私鑄銭・模鑄銭など私的に鑄造される銭貨は、地域ごとにつくられるものも多く、東ユーラシア全域を俯瞰できる資料は限られてくる。そのため、本論考では私鑄銭が横行する以前の15世紀初めまでの資料を分析の範囲としたい。

本論考であつかう資料は、考古資料としての出土銭である。銭貨は遺跡の発掘や不時発見により東ユーラシアにおいては、あらゆる場所で普遍的に発見される遺物のひとつである。その中でも貨幣として銭貨が大量に流通していた地域では、一括出土銭として出土する例があり、重要な情報を提供してくれる。一括出土銭は大量の銭貨が人為的に地中に埋められたもので<sup>(3)</sup>、当時の流通貨幣の様相を具体的に知ることが可能となる<sup>(4)</sup>。

また銭貨は、この時期の遺跡を発掘すると、住居や寺院あるいは埋葬施設など遺構の性格に関わりなく、広く発見される遺物である。それらは単体あるいは数枚で発見されることが多く、そうした銭貨を個別出土銭と呼ぶ（櫻木2009: 24-25）。個別出土銭は、遺跡の包含層中から発見されたり、遺構に伴わず単体で出土したりする事例が多く、時期が推測可能なものは必ずしも多くはない。ここでは検討に必要な事例を抽出し、ある程度の時間幅をもって、遺跡ごとに集成して分析を進めたい。

いわゆる古銭の研究は、古銭学として精緻な分類が行われ、多くの辞典やカタログが刊行されている。また歴史学の一分野としての貨幣史、社会経済史の研究も膨大な蓄積がある。しかし、遺跡から出土する銭貨を研究対象とし、考古学的手法を用いて進められている研究は、東ユーラシアにおいては思いのほか少ないのが現状である。

日本では、出土銭研究の中世考古学における重要性に着目した『出土渡来銭——中世——』（坂詰編1986）の刊行以降、1993年の出土銭貨研究会の発足及び機関誌『出土銭貨』の発行、鈴木公雄による考古学的手法の確立（鈴木1999）など、着実に考古学研究の一分野として研究が蓄積されつつある。近年では、櫻木晋一が銭貨研究を体系的にまとめ、「貨幣考古学」を提唱するに至っている（櫻木2009, 2016）。

こうした日本での考古学における研究の進展や調査法の確立を基礎として、筆者は東ユーラシアでの出土銭研究を進めてきた。幸いにもこれまでに、中国をはじめ、東南アジアや北アジア、東北アジアなどで、調査を行う機会を得た（付記参照）。調査地域は、一括出土銭の発見されているベトナムやインドネシアだけでなく、個別出土銭しか発見されない地域も多く、貨幣以外の用途で銭貨を使用している場合も少なくない。本論考は、こうした広範囲に広がる様々な種類の出土銭を調査し、東ユーラシアの中に位置づける試みの過程で、導き出されたものである。

## 2. 東ユーラシアにおける出土銭の事例

### 1) 一括出土銭

#### ① 中国

まずは大量に銭貨が埋められている一括出土銭の事例を、地域ごとに概観したい。

中国の事例は、筆者が集成したものを使用する（三宅 2005a）<sup>(5)</sup>。中国国内の一括出土銭は、北宋、南宋のみならず、北方の異民族王朝である遼、金、西夏および元のものも含まれている。一括出土銭は合計 249 例あり、内訳は北宋 45 例、南宋 67 例、遼 13 例、金 98 例、西夏 17 例<sup>(6)</sup>、元 9 例である。少ないものは数十枚にすぎないが、多いものでは 100t をこえる銭貨が埋められていた。

また銭貨の素材であるが、この時期のものは青銅と鉄の 2 種類が確認できる（以下「銅銭」、「鉄銭」と呼ぶ）。それぞれは基本的に流通圏が異なっていたことから、一括出土銭で発見される場合でも銅銭のみ、あるいは鉄銭のみが埋められている場合がほとんどである。

鉄銭の一括出土銭は、北宋、南宋、西夏で発見されている。北宋は 45 例中 20 例が鉄銭であり、南宋は 67 例中 18 例あるが 2 例で銅銭と鉄銭が共伴していた<sup>(7)</sup>。西夏では 17 例中 7 例が鉄銭であり、1 例は銅銭約 2,000 枚とともに出土している。その他は銅銭の事例である。

では、これら中国国内で流通していた銭貨は、どのような種類の銭貨がどれくらいの割合で流通していたのであろうか。ここでは銭種組成について、銅銭の一括出土銭から分析してみたい<sup>(8)</sup>。まず大量の銭貨を鑄造した北宋、およびその南半を治めた南宋であるが、どちらももっとも多いのは北宋銭であり、北宋では 91.15%、南宋では 91.21% と<sup>(9)</sup>、全体の 90% 以上を占める。次に多いのは唐の開元通寶であり、北宋で 7.99%、南宋で 6.62% を占める。北宋銭と開元通寶、この 2 種類の銭貨で流通銭貨の大半を占めていることが分かる。

この両者が大半を占めるのは北方の異民族王朝でも基本的には同じであり、遼では開元通寶 30.09%、北宋銭が 68.92%、西夏では開元通寶 11.28%、北宋銭

85.55%、金では開元通寶 7.63%、北宋銭 90.35% であった。割合が若干異なるものの、この2種類の銭貨が大半を占めていることは明白である。これは、北方の異民族王朝でも流通銭貨には、大量の北宋銭が流入していたことを物語っている。また同時に、自国で鑄造する銭貨が少量にとどまっており、銭貨流通に大きな影響を及ぼすほどではなかったと考えられる。なお元では開元通寶 5.62%、北宋銭 73.54% であり、若干割合が下がるほか、南宋銭が 20.01% と一定の数量を占めている。

次に、各王朝での流通銭貨の詳細を分析する。銭貨の種類と割合を、ここでは銭種組成と呼び、王朝ごとにその比率を比較してみたい。流通銭貨には多くの種類が存在するため、出現率の高い上位 30 種類の銭貨を抽出して比較してみる(図1)。この銭種組成のグラフを観察すると、若干の差異はあるものの、どの王朝でもおおむね近似した折れ線を描くことがわかる。これは各種銭貨の比率が、王朝が異なっても同じであることを示しており、北方の異民族王朝へ流出した銭貨も、選別などは行われず、宋で流通していたものがそのままたらされたと考えられる。

しかし、遼の一括出土銭の銭種組成は、その他の王朝のものと若干異なっており、別に検討が必要であろう。まず、開元通寶が 30.09% (会昌開元も含む) と、他の王朝に比べかなり高い比率を示す。これは遼が北宋の建国よりも早く成立しており、後晋の成立時に燕雲十六州を支配下に置くなど、開元通寶が大量に流入する契機があったことを示している<sup>10)</sup>。また北宋銭に関しても北宋前半の銭貨が高い割合を示し、後半に鑄造された銭貨ほど低くなっていく傾向が見られる。これは北宋と同時期に存在した遼へ、国境を越えて銭貨が流入する際に時間差が生じており、新しく鑄造された銭貨が北宋国内で十分に各地に流通した後に、遼へともたらされたためと考えられる。つまり同時期に存在した王朝への銭貨流出には、タイムラグがあったことを示している。

## ② 日本

次に、一括出土銭が多く発見されている日本をはじめとする周辺地域の状況を見ていきたい。日本の事例は、鈴木公雄の集成がある。鈴木は 1998 年 6 月

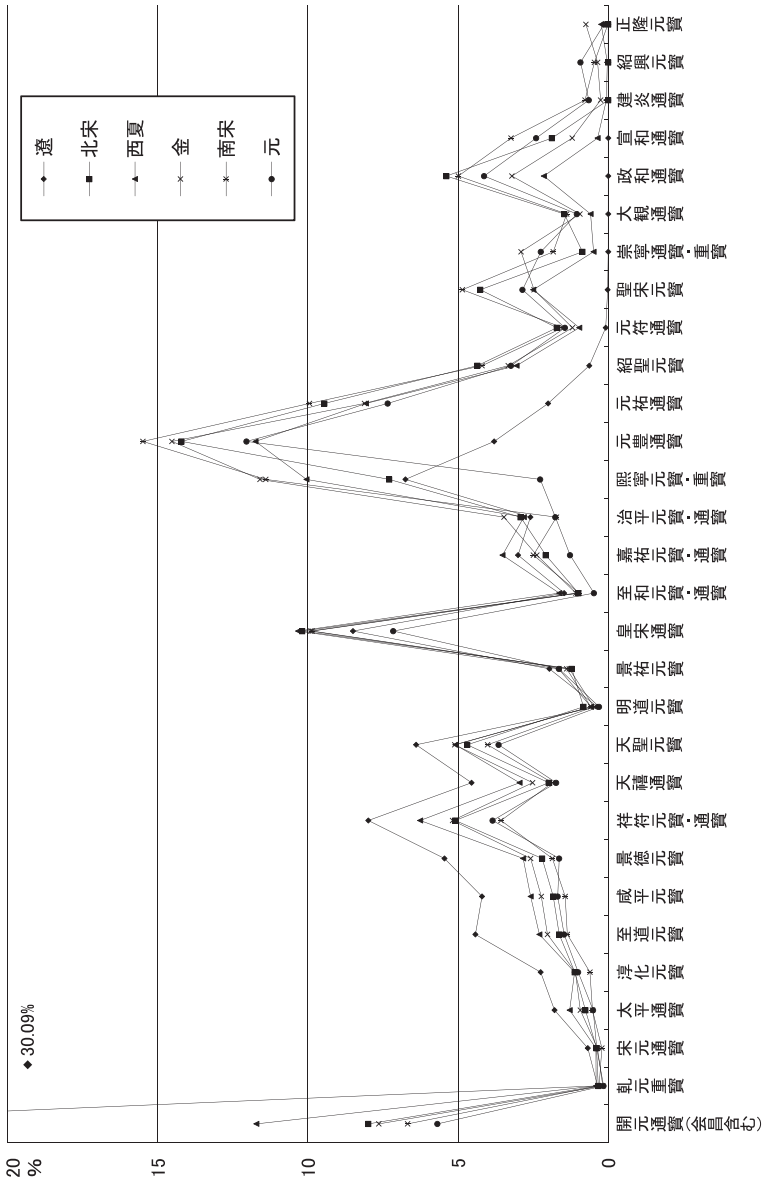


図1 中国の一括出土銭の銭種組成

までに収集した 1,000 枚以上の一括出土銭 217 例<sup>(11)</sup>、約 350 万枚を分析している（鈴木 1999）。これらを基に日本の一括出土銭の状況をつかんでおきたい<sup>(12)</sup>。

鈴木公雄によれば、一括出土銭の出土例は沖縄県など一部の地域を除き、ほぼ全国におよんでおり、埋められた時期はおおよそ 13 世紀後半から 16 世紀末にわたるといふ。これらに含まれる銭貨は中国銭を主体とし、非常に多くの種類が確認される。中でももっとも多いのは北宋銭で全体の約 77%、次に多いのは明銭約 8.7% と唐銭約 7.6% となり、これに南宋銭約 1.9% を加えると全体の 95% をこえるという。明銭は鈴木編年の 3 期（14 世紀第 4 四半期～15 世紀第 1 四半期）以降に出現し、洪武通寶と永楽通寶が多くを占め、中でも永楽通寶が多く、含まれる量の総順位では 6 位と高い<sup>(13)</sup>。唐銭では開元通寶が多く、順位は 5 位となっている。なお、日本の古代において発行された古代銭貨（皇朝十二銭）は、ほとんど含まれておらず 0.002% に過ぎない。これは日本の古代と中世における銭貨流通上の断絶を示すものと考えられている。

次に、日本で一括出土銭がつくられはじめる時期と、中国のそれを比較してみたい。これにより、両国で銭貨が流通していた時期が同じか異なるかが明確になると考える。図 2 は日中の一括出土銭を、最新銭をもとに 25 年ごとに区切って比較してみたものである。中国は筆者の、日本は鈴木公雄の収集した事例をもとにしている。この図では、中国と日本の一括出土銭がつくられた時期は、明確に異なっていることが分かる。中国では北宋、南宋の時期に中心がある一方、日本では南宋末から事例が増加し、中国の元、明の時期にもっとも多くの事例がみられる。周知の通り、元や明では紙幣の使用が進められ、銅銭の禁令も出されている。その時期に日本へ銅銭が輸出されたものと理解できよう<sup>(14)</sup>。

では、中国から日本へともたらされた銭貨は、中国で流通していたものが選別されずにすべて運ばれたのであろうか。出土する銭貨を分析すると、日本では発見されない、ないしはきわめて少ない銭貨がある。鉄銭と大銭である。

鉄銭の一括出土銭は前述の通り北宋、南宋、西夏で発見されており、鉄銭行使地域を設定することにより、鉄銭を流通させていた（三宅 2005b）。一方で日本では鉄銭は特異な事例を除き発見されず、櫻木は「古代以来中国では流通し

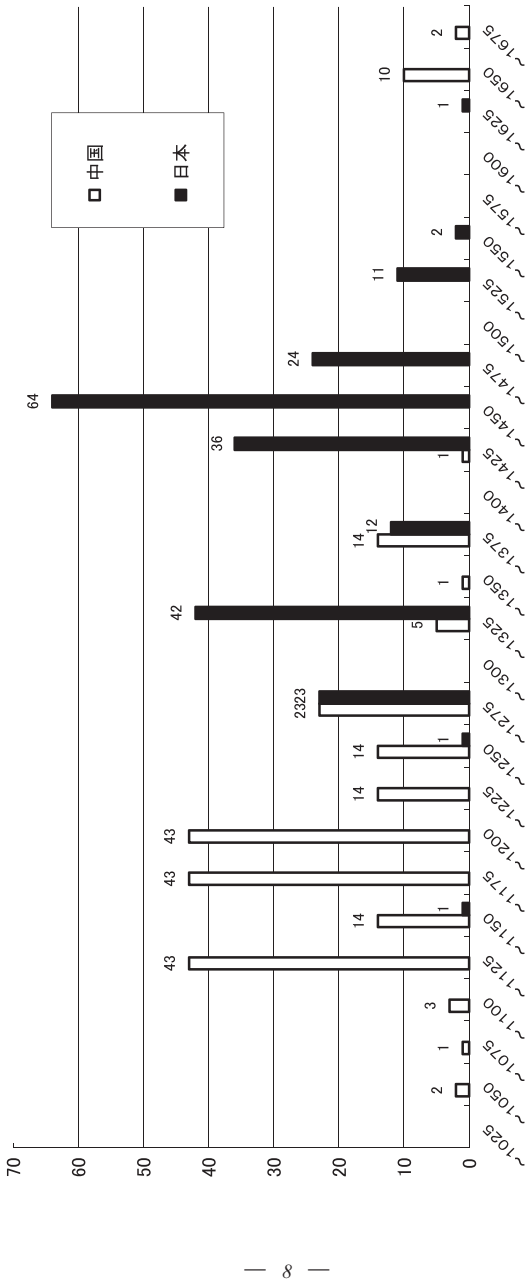


図2 最新銭による日中の時期差



ていた鉄銭が、中世日本では流通していなかったというのが常識」であるとする（櫻木 2009: 120）。鉄銭は日本には持ち込まれなかったと考えられよう。

また大銭も日本では発見例が少なく、特に一括出土銭の中にはほとんど含まれていない点を指摘できる。大銭は、小平銭（一文銭）より直径が大きく、1枚あたりの価値を2文、3文、5文、10文などとして通用させるためにつくられた大型銭である。中国の一括出土銭には大銭が含まれているのが一般的と考えられ、金の事例で13.96%（馬 1994）、南宋の事例で15.92%（陳 1988）を大銭が占めており、流通する銭貨の14～16%程度が大銭であったと推測される。

その一方で、日本では大銭が出土することは非常に少ない。大銭を集成した嶋谷和彦によれば、日本国内で発見された大銭は68遺跡203枚であり、一括出土銭では7遺跡10枚のみであったとし、日本国内の経済行為の中では使用できなかったと考えている（嶋谷 2006: 47-53）。つまり、日本では大銭は銭貨の流通から排除されていたと考えられる。

上記のように、日本にもたらされた中国の銭貨は、鉄銭と大銭が排除されていた。これは逆にいえば「銅の小平銭」であれば受け入れられた、ということである。ここではさらに、日本で受容された銅の小平銭について、その銭種組成がどのようなものであるかを検討してみたい。

櫻木晋一は、明銭を含まない鈴木公雄編年1、2期の一括出土銭から、含まれる量の多い18種類を抜き出し、その比率を分析した。その結果、全国的にかなり均一な銭種組成であることを明かにした。櫻木はその理由を「流通銭貨の組成が中国から輸入した時点でほぼ一定であったことの反映である」と考えている（櫻木 1992: 38-40）。

この点について、中国の一括出土銭と比較をしたものが図3である。この図をみると、若干割合の異なる部分があるものの、ほぼ中国の各王朝と同じような折れ線を描き、それぞれの銭貨の割合は近似していることがわかる。これにより櫻木の説くとおり、中国での流通銭貨の状況が日本の銭種組成に反映していることが明らかとなった<sup>15)</sup>。

また日本と遼の銭種組成が異なることは、流入時期を検討する上で重要である。北宋の存続していた同時期に宋銭を輸入した遼では、北宋前期の銭貨の割

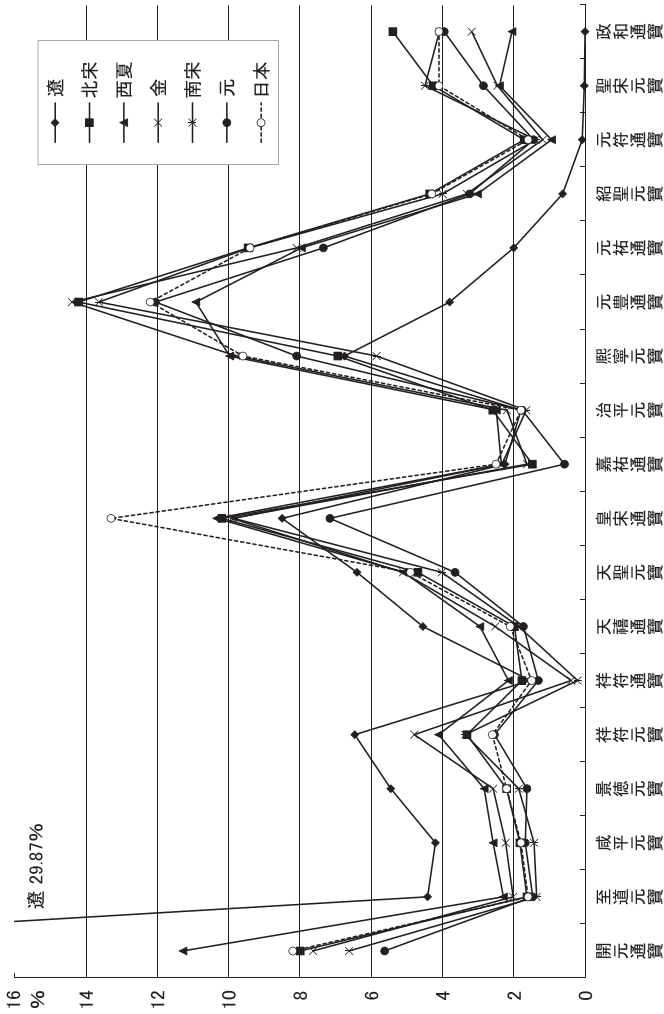


図3 中国と日本の錢種組成の比較

合が高く後期のものは低い傾向があった。日本の一括出土銭にそうした傾向はなく、北宋や南宋あるいは金の錢種組成に近い。これは中国本土で十分に錢貨が流通し、均質な錢種組成になってから日本へ持ち込まれたことを示している。鈴木公雄は、中世史料の検討などから日本での錢貨流通は12世紀中頃に求められるが、備蓄銭（一括出土銭）の開始時期は13世紀後半とする（鈴木1999：

59-63)。つまり南宋の時期に日本へ銭貨が流出しはじめるが、銭貨を埋める行為は、均質な組成を持った大量の銭貨がもたらされる元代になってから、本格的に始まったと考えられるのである。この鈴木の見解は、銭種組成の比較結果とも矛盾せず、首肯できる。

### ③ ベトナム

筆者は2006年から2009年にかけてハノイにて、7回にわたり一括出土銭の調査を行った。ここでは、これらの調査から得た知見をもとに、ベトナム北部の銭貨流通の状況を概観する。我々が調査した一括出土銭は6点あり、ベトナム北部で発見されたものである。残念ながら出土地点などは明確ではない。このうち、本論考に関係するものは、我々が2号資料、4号資料と呼ぶ2点の一括出土銭資料である。最新銭は2号資料が洪武通寶、4号資料が大中通寶であり、4号資料の方がやや古いものの、どちらも埋められた年代は14世紀末から15世紀初頭と考えられる(三宅2014a)。

2号資料は素焼きの筒形容器に、計3,691枚の銭貨が入れられていた。銭貨は底部に一貫文の縉銭を入れ、その上に短い縉銭26点を並べ、さらにその上に545枚を一本にした長い縉銭が巻き上げるように置かれていた。一貫文縉と短い縉は67枚を基本単位(67陌)としていた。それらの縉銭の隙間を埋めるようにバラバラの銭貨が入れられていた。銭種は中国銭のみであり、最古銭は唐・開元通寶、最新銭は明・洪武通寶であった。北宋銭が主体であり全体の86.26%を占め、次いで開元通寶が6.45%あり、両方で92.71%を占める。

4号資料は素焼きの筒形容器に、計3,535枚の銭貨が入れられていた。銭貨はバラバラに入れられた銭貨の他、9点の短い縉を検出した。短い縉は2号資料同様67枚を基本単位にしていた。銭種は2枚の前黎・天福鎮寶を除きすべて中国銭で、最古銭は前漢・五銖、最新銭は明・大中通寶であった。北宋銭を主体としており、全体の86.82%を占める。また開元通寶も8.23%あり、北宋銭と開元通寶で95.05%を占める。

これら我々の調査した一括出土銭の事例をもとに、ベトナム北部における流通銭貨の特徴を検討してみたい。まず、発見された銭貨は4号資料の天福鎮寶

2枚を除き、すべて中国銭であった。ベトナム北部は10世紀に中国から独立し自国の王朝を建て、独自の銭貨の発行も開始される。その発行量は不明であるが、一括出土銭資料に自国の銭貨がほとんど含まれていないことをみると、中国銭の流入以前のベトナムにおける銭貨の流通量は決して多くはなかったと推測される。桃木至朗によるベトナム北部の金石文の検討によれば、ベトナム北部では14世紀の陳朝後期に、それまであまり見られない銭の寄進などの記事があらわれるといい(桃木2001:189-191)、この時期以降に銭貨の流通が本格化し、それ以前は銭貨流通があまり多くなかったと推測される。

次に、これらの資料の中に鉄銭と大銭が含まれていないことを指摘できる。大銭は2号資料の折二銭が3枚含まれるのみであった。このことからベトナム北部では、「銅の小平銭」のみが流通していたことが明らかとなった。

では、それらの銭種組成をさらに詳細に分析して、中国や日本の事例と比較してみたい。中国の事例は筆者が収集した中でもっとも量が多く安定している金の事例(三宅2005a:94-102)で代表させる。金の一括出土銭の事例の合計は約41万枚あり、北宋の北半を領有したという歴史的経緯から、北宋の銭種組成とかなり類似している。日本の事例はもっとも出土量の多い函館市の志海苔古銭と呼ばれる一括出土銭の事例(市立函館博物館1973)との比較を行いたい。志海苔古銭は約37万枚と国内最多の出土量であり、当時の銭貨流通の状況をよく反映していると考えられる。また最新銭が明・洪武通寶であることから、ベトナムの2号資料と同じである。

上記の資料から、上位30位までの銭貨を抜き出し、その比率を%で示したものが図4である(図にはインドネシアの銭種組成も含まれている)。この図から、中国と日本のみならずベトナム北部においても、流通銭貨の銭種組成は同じであったことが読み取れる。

#### ④ インドネシア

我々は、2011～2013年にインドネシアにて出土銭を調査し、その際にジャワ島東部マラン県山中出土の一括出土銭2点を調査することができた。ここではその事例をもとに、インドネシアにおける銭貨流通の状況を概観したい(三

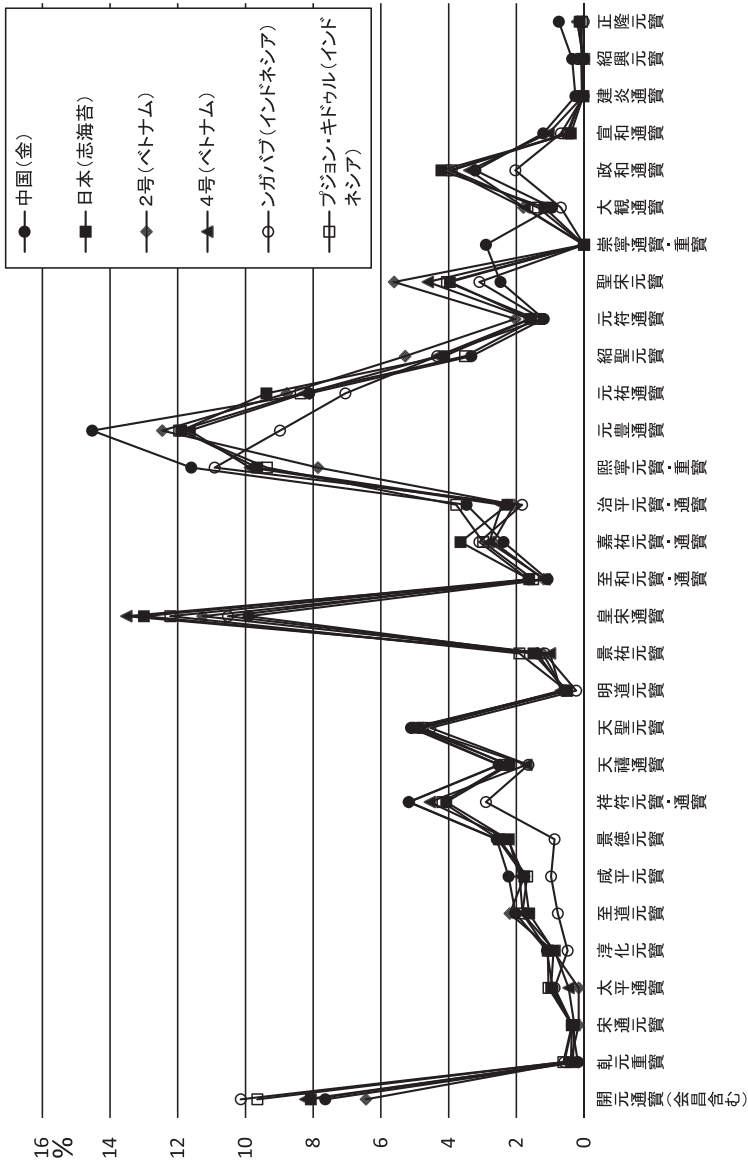


図4 中国・日本・ベトナム・インドネシアの錢種組成の比較

宅 2014b)。

最初の事例はプジョン・キドゥル出土銭である。総計は 4,933 枚、みな中国銭であり、最古銭は新・貨泉、最新銭は南宋・咸淳元寶であった。北宋銭がもっとも多く 4,297 枚で、87.11% を占める。次いで唐・開元通寶 476 枚 (9.65%)、南宋銭 102 枚 (2.06%) であった。

もう 1 点はンガバブ出土銭である。総計は 1,036 枚、みな中国銭であり最古銭は唐・開元通寶、最新銭は明・永楽通寶であった。北宋銭がもっとも多く 735 枚で、70.95% を占める。次に多いのは明の銭貨 150 枚 (洪武通寶 78 枚、永楽通寶 72 枚) で、14.48% を占める。唐・開元通寶は 105 枚で、10.14% であった。

これら 2 点の一括出土銭から、ジャワ島東部では鉄銭はなく、銅銭のみが流通していたことがわかる。また大銭はプジョン・キドゥルの事例に 4 枚の折二銭が含まれているのを除けば、すべて小平銭 (一文銭) であった。これらの点から、インドネシアに流入した銭貨も、日本・ベトナムと同様、「銅の小平銭」のみが受容されていたことがわかる。

次に、銭種組成を分析する (図 4)。ンガバブの事例は 1,036 枚と枚数が少ない上、明銭の比率が高いため、若干異なる部分も見られるが、プジョン・キドゥルの事例は、他の国々の事例とかなり似た折れ線を描くことがわかる。このことから、インドネシアのジャワ島東部においても「銅の小平銭」であれば、銭種にこだわらずすべて受容されていたことが明らかとなった。

以上、東ユーラシアで発見された一括出土銭の事例について概観した。東南アジアの事例は、筆者の調査によって明かとなった部分も多い。これらの地域では、銭貨は貨幣として経済活動において重要な役割を果たしていたと言える。また日本、ベトナム、インドネシアでは、中国の銭貨をいわゆる「渡来銭」として受容し、自国の貨幣経済に組み込んでいた。こうした独自の流通圏の共通性については、第 3 章で改めて検討する。次に、個別出土銭の事例を見ていく。

## 2) 個別出土銭

### ① モンゴル

個別出土銭は、一括出土銭のように大量の銭貨が一括して発見されるのではなく、遺跡の調査などにより個別に出土するものを指す。特に都市遺跡や土城などからは、単体ではあるものの、集計するとかなりの量の銭貨が出土する場合がある。そのような個別出土銭が見られる地域として、北アジアや東北アジアがあげられよう。以下に、それぞれの地域を概観し、特徴を抜き出してみたい。

まず、モンゴル国の事例を見てみたい。ここではモンゴル帝国の首都であったカラコルム遺跡の状況を概観する。この遺跡では S. V. キセリョフによる 1948,49 年の調査 (Kiselev, S. V. *et al.* 1965) をはじめとして、複数回の発掘調査が行われており、近年では 2000 年代にドイツとの大規模な共同調査も進められている (Bemmann, J. *et al.* 2010)。筆者は、2017 年にキセリョフおよびドイツとの共同調査により出土した銭貨を再調査する機会を得た。ここではその際に得られた知見を記述してみたい<sup>40)</sup>。

カラコルム遺跡で発見されている 15 世紀以前の銭貨は、銭銘が判明したものを抽出すると総計 534 枚である。北宋の銭貨を主体としており合計 435 枚、81.46% を占める。他に金の銭貨 40 枚や、唐・開元通寶 27 枚を含む五代十国以前の王朝のもの、南宋銭などが見られた。元の銭貨は至大通寶 4 枚のみであった。

これらの銭貨の特徴をあげるなら、まず大銭の多さであろう。大銭は北宋・南宋の銭貨に見られ、合計で 131 枚、全体の 24.53% と、ほぼ 4 分の 1 を占める。前述のように、中国の一括出土銭では、大銭の割合は 14~16% 程度と推測されることから、カラコルム遺跡の大銭は 10% 程度多くなっており、注目される。

### ② 沿海州

ロシア沿海州には、金ないし東夏ころと考えられている城址が複数存在している。これらの遺跡の出土銭貨に関しては、ロシア科学アカデミー極東支部極

東諸民族歴史学・考古学・民族学研究所の A. L. イーヴリエフによる集成があり、その成果をもとに筆者は氏との共同研究を行ったことがある（三宅・イーヴリエフ 2008）。ここではそのデータを中心に、沿海州の出土銭貨の様相を概観してみたい。

イーヴリエフの 2008 年までの集成によれば、沿海州の出土銭は 11 遺跡から総計 1,317 枚が発見されている。その大半が発掘調査などにより出土した個別出土銭であり、一括出土銭はない。銭種は北宋銭を主体としており、開元通寶や金で鑄造された銭貨などが含まれる。

これら出土銭の特徴として、大銭が多く含まれていることが指摘できる。大銭は折二や当十など合計 299 枚あり、全体の 22.70% を占めている。この割合は、前述の中国本土で発見される一括出土銭に含まれる割合よりも数% 高く、沿海州では大銭が比較的多く流通していたと推測される。この状況は、上記の通りモンゴル高原のカラコルム遺跡とも共通している。

### ③ サハリン

サハリンの遺跡からも銭貨が発見されることがあり、各地の博物館などに収蔵されている。サハリンの出土銭については、I. A. サマーリンによる集成がある（サマーリン 2008, Samarin I. A. 2006, 2011）。また筆者も 2010～2012 年にサハリン各地の博物館や大学に収蔵されている銭貨の調査を行う機会を得た。銭貨は唐の開元通寶から、北宋銭、明銭をはじめとして清銭まで、多くの中国銭が確認されたほか、近世日本の寛永通寶や天保通寶などの日本銭も複数確認されている（三宅 2013）。ここでは 15 世紀以前の銭貨について、概観したい。

サハリンから発見される 15 世紀以前の銭貨は、32 枚と大変少ない（三宅 2013: 76）。王朝で見ると唐 1 枚、南唐 1 枚、北宋 24 枚、金 5 枚、明 1 枚である。このように少ない枚数しか発見されていないことから、この当時サハリンへは貨幣経済が及んでいなかったものと考えられる。その分布は大半がサハリン北部であり、中国本土からアムール川下流域を経てサハリンへもたらされたものと推測される。

ところで、サマーリンはサハリン北部で永楽通寶が 1 枚出土していることを



報告している（サマーリン 2008: 75）。中国本土では永楽通寶がほとんど発見されないことを考えると、この永楽通寶は北海道を經由して日本の本州からもたらされた可能性を否定できない。この点については第4章で検討したい。

サハリンから出土する銭貨の中に、大銭が多数存在する点は注目される。大銭は金の泰和重寶 5枚とはじめとして 14枚確認され、43.75%を占めている。大銭は前述のごとくモンゴルや沿海州でも比較的高い割合で出土しており、北アジア・東北アジアに共通する傾向と言えよう。中でもこのサハリンでは4割を越える高い割合である。これは流通銭貨が持ち込まれたと考えるより、装飾品など経済外使用の目的をもって大型の銭貨が選ばれたと考えるべきであろう。この考えを補強するものとして、サハリンで発見される銭貨の多くに、穿孔が見られる点を指摘できる。

これらの銭貨のうち、13例に中央の方孔とは別に孔があげられており、特に大型の泰和重寶にはすべてに穿孔が見られ、完形の3枚には2箇所孔があげられていることが観察できる（三宅 2013: 78）。サマーリンは「この貨幣の表面が著しく減耗し、連綴または衣服に縫着するための補充の孔が二つ開いていることは、サハリン北東部のニヴフがこれを装飾に用いたことをうかがわせるのである」とし、経済外的使用として装飾品に用いられた可能性を指摘している（サマーリン 2008: 60）。このことは、銭貨が経済活動の中心地から遠く離れた場所で発見される場合、貨幣としての役割を失い、経済外の目的で使用される可能性を考慮する必要があることを示している。

### 3. 流通する銭貨の特徴

#### 1) 日本・ベトナム・インドネシア

##### ① 日本

これまで東ユーラシアにおける出土銭貨の事例を概観してきた。中でも、銭貨を経済活動の根幹を担う貨幣として流通させた中国、日本、ベトナムおよびインドネシアでは一括出土銭の事例を概観し、中国の周辺部にあり一括出土銭は見られないが、ある程度銭貨が発見される地域としてモンゴル、沿海州、サ

ハリンの事例を見てきた。これらは筆者が実際に調査を実施した事例を中心に紹介してきたが、もちろんこれ以外の遺跡からも普遍的に銭貨が出土することは言うまでもない。

ここでは、中国本土以外で発見される銭貨について、その特徴を抽出する。また離れた地域における銭貨受容に見られる共通性についても検討したい。まず日本であるが、12世紀後半以降に中国から銭貨がもたらされると、銭貨による貨幣経済が全国的な広がりを見せる。その際に受け入れられた中国銭は、銅の小平銭である。

一方、大銭は日本では流通銭貨としては排除されていた。もしも銭貨として流通させようとするなら、わざわざ周囲を削って小平銭と同じ大きさにする必要があった。例えば函館市で発見された志海苔古銭には、小平銭と同じ直径に周囲を削ったものが発見されている（市立函館博物館 1973: 16）<sup>17</sup>。このことは、大銭はそのままでは通用せず、小型の銭貨に加工してはじめて小平銭と同じく一文で流通し得たことを物語る。

また中国本土との銭貨流通を比較した場合、鉄銭が見られないことも、日本の特徴と言えるであろう。前述の通り、北宋、南宋、西夏では鉄銭の一括出土銭は多い。その一方で日本では基本的に鉄銭は発見されない。櫻木晋一は特異な事例として最初期に分類される一括出土銭である福岡県甘木市（現朝倉市）真奈板遺跡で8枚の鉄銭が出土した事例をあげたうえで、「鉄銭は中世日本では流通していなかったというのが常識である」としている（櫻木 2009: 120）。

## ② ベトナム

ベトナム北部の一括出土銭の事例の特徴も、日本と共通しており「銅の小平銭」のみが受容され、大銭や鉄銭が排除されていたことが確認できる。ベトナム北部で筆者が調査した事例では、4号資料には大銭は1枚もなく、2号資料では折二銭が3枚確認されたのみであった。また鉄銭は1枚も含まれていなかった。

これらの一括出土銭の中で、ベトナム鑄造の銭貨は、4号資料の天福鎮寶2枚のみであった。ベトナム銭がなく、中国銭のみで構成されており、また中国

本土と隣接しているベトナム北部の地理的条件を考えると、これらの一括出土銭は中国の流通銭貨が直接持ち込まれそのまま埋められたもので、ベトナムの貨幣流通状況を反映していない可能性がある、と思われるかもしれない。

しかし、前述の通り中国の一括出土銭に含まれている大銭がないことは、ベトナム北部において中国とは異なる自立的な銭貨流通が行われていたことを示している。さらに次の2点によって、これらの一括出土銭はベトナム北部で流通していた銭貨が埋められたものであり、当時のベトナム北部の銭貨流通の実態を示していると考えてよい。

まず1点目は、銭貨を入れた容器の検討である。菊池誠一は、2号資料の素焼きの筒形容器は陳朝ころ、4号資料の素焼きの筒形容器については陳朝から黎朝前期のベトナム北部製のものと推測している（菊池2012: 149）。ベトナム北部で作られた容器に入れていることは、これらの銭貨が当地で流通していたことを示している。

もう1点は、短陌慣行が確認されたことである。2号資料、4号資料ともに紐により銭貨を連ねた緡銭が発見されており、中でも2号資料では完全な一貫文緡が検出された。これらの緡銭は、両資料ともに100文にあたる単位が67枚（67陌）であった<sup>18)</sup>。この67陌の短陌慣行は、中国には見られないものであり、ベトナム北部独自のものと言える。つまり2号資料、4号資料ともにベトナムの短陌慣行に準じて緡銭を作成していたことになり、この点からもこれらの一括出土銭が、ベトナムで流通していた銭貨を埋めたものであることが分かる<sup>19)</sup>。

以上の点から、ベトナム北部で発見された一括出土銭の事例は、当地で流通していた銭貨を埋めたものであると言える。そして、その特徴は「銅の小平銭」のみを使用していたと、まとめることができよう。また日本と同様に、鉄銭が含まれていないことも、特徴として付言しておきたい。

### ③ インドネシア

インドネシアのジャワ島における一括出土銭も、日本、ベトナムと同様、「銅の小平銭」のみが受容されている。ンガバブの一括出土銭には1枚も大銭

はなく、プジョン・キドゥルの事例では南宋の折二銭が4枚含まれているだけであった。このことから、インドネシアにおいても大銭は排除され、小平銭のみが流通していたことが分かる。

プジョン・キドゥルの一括出土銭は、最新銭が南宋末の咸淳元寶（背“八”、1272年）であることから、南宋末ないしは元代に入ってから埋められたものと考えられる。青山亨によれば、12世紀のクディリ王国のときにはすでに海外交易が盛んであったとし、ジャワの海外輸出品として象牙、犀角や種々の香木などがあり、とりわけ胡椒の集散地がジャワであったことから、「代価として銅銭を積み込んだ中国の商船が多数買い求めに来た」という。またジャワにとっても銅銭は重要な輸入品であり、「クディリ王国時代以降は中国の銅銭の流通が増大するようになり、貨幣経済の進捗につながった」とする（青山2001a:162-163）。

銅銭の使用はマジャパヒト王国にも引き継がれる。青山は『島夷誌略』のジャワの記述を紹介し、「銅銭を用いるが、一般には、銀、錫、鉛、銅を混ぜて鑄造した、巻貝大のものを銀銭と名づけて、銅銭を計量するのに使用している」とする（青山2001b:215）。また明代に入り、鄭和の遠征に随行した馬歡の記した『瀛涯勝覽』にも、「取引には中国の銅銭を用いる」とする記述があるという（青山2001b:226）。ンガバブの一括出土銭は明の永楽通寶が最新銭であり、洪武通寶と永楽通寶合わせて14.48%を占めていた。これは、この時期のジャワにおける銭貨流通の状況を反映しているものと考えられる。

上記の検討から、インドネシアのジャワにおいては、いつかは明確ではないものの12世紀以降に中国の銅銭が受容され、クディリ王国時代以降も引き続き貨幣経済の発達が見られたことがわかる。そして一括出土銭を分析すると、埋められている銭貨は小平銭のみであり、大銭が排除されていた様子が読み取れる<sup>20)</sup>。

#### ④ 独自の流通圏形成における共通性

以上、中国の周辺で発見される一括出土銭の状況を検討してきた。一括出土銭が発見される日本、ベトナム、インドネシアは、中国の銭貨をいわゆる「渡

来銭」として受容し、自国で独自の貨幣経済を発展させた地域である。それらは決して同じ経済圏を形成していたのではない。しかし、銭貨受容のあり方は、非常に共通していることが確認できた。すなわち「銅の小平銭」のみを受け入れ、大銭と鉄銭を排除するのである。

これらの地域で大銭が流通しなかった理由は、流通時における額面価値の信用が、維持できなかったためと推測される。周知のごとく中国では、大銭は国家により発行され、その額面上の価値が維持できるよう国家が働きかけを行っていた。しかし民間では必ずしも国家の思惑通りに流通したわけではなく、しばしば意図した額面よりも価値が下落する現象が見られた。宮澤知之は宋代に政府が当十の価値を、地域によって当五や当三に改めた事例を紹介し、「宋朝が大銅銭に幣値を入れなかったのは、むしろ変更もありうるという前提が暗黙のうちにあったのではないか」としている（宮澤 2007: 212）。

中国においても上記のように大銭の価値を維持することが困難であれば、国家による強制力のない日本やベトナム、インドネシアでは大銭の流通が困難であったことは想像に難くない。日本では中国銭の受容は民間主導で始まり、国家としては渡来銭の使用を禁止している。それにも関わらず日本で渡来銭の使用が広まった点について、中島圭一は「商人その他、一般の人々はこれらの銭によほど強い信任と与えていたと考えるしかあるまい」と述べ、その受容の背景には「素材価値や古代幣制の記憶、大陸における通用や舶来性など」をあげている（中島 1999: 117-118）。

素材価値や大陸における通用で信任を得ていた銭貨とは、上記の検討から導くならば「銅の小平銭」である。このような受容の背景が、ベトナムやインドネシアにも共通するならば、銭貨を中国から受容して独自の流通圏を形成したこれらの地域では、共通するメカニズムが働いたと言えよう。

同様のことは、鉄銭についても言える。中国の鉄銭は原材料が安価であることから財政を補う目的で発行され、銅の採れない四川地区と軍の駐屯した国境付近で流通した。その際、鉄銭行使地域を設定して銅銭を排除し、鉄銭のみを流通させる政策をとった。これは安価な鉄銭を銅銭と並行して流通させて、鉄銭が不通になることを避けるためである（三宅 2014a: 268）。このように流通す

る地域が管理された鉄銭は、自立的に流通が開始され、国家による強制力が働かない国外で受容される可能性は低い。

以上の点から、これらの地域では「銅の小平銭」のみが流通していたと考えられる。

## 2) モンゴル・沿海州・サハリン

### ① モンゴル

中国本土と隣接しているモンゴルや沿海州、またそれらのさらに周縁にあるサハリンなどでは、一括出土銭は見られず、個別出土銭のみが発見される。これらの地域の特徴をまとめると、大銭が多く見られる点にあると言えよう。

モンゴル高原のカラコルム遺跡の出土銭をみると、前述の通り大銭が24.53%を占めており、中国本土の一括出土銭に見られる数値よりも10%ほど高い。これは大銭が受容されたことを示しており、それを流通させる制度が存在したことを推測させる。つまり、大銭も含んだ銭貨が流通する、中国本土の幣制が機能していたと考えることができる。

そのためモンゴル高原では、銭貨は地域内の通貨として使用されるのと同時に、中国本土との決済にも大きな役割を果たしたであろう。そして流通していた銭貨は多くの場合、中国へ還流することを前提としていたと考えられる。その流通量は地中に埋めるほど多くはなく、むしろ中国本土との決済に使用する目的の方が強かったため、一括出土銭などはつくられず、その中で中国本土に環流せずに残ったものが、個別出土銭として遺跡から発見されていると推測される。

### ② 沿海州

沿海州もモンゴル高原と同様に、中国への還流を前提として、銭貨が流通していた地域と考えられる。この地域で発見される銭貨は、金ないし東夏の時期と考えられる城址から出土しており、前述の通り大銭が22.70%を占めている。この数値も中国本土の一括出土銭の数値よりも数%高い割合を示している。

この地域もおそらくは独自の貨幣流通圏は形成せず、中国本土の貨幣流通の

影響を受けながら流通していたと考えられる。そして、中国本土へ環流するものが多い中で、その流れにのらなかった銭貨が、発見されているのであろう。

### ③ サハリン

サハリンはモンゴル、沿海州よりもさらに辺縁に位置し、沿海州などを通じて中国銭がもたらされた地域と考えられる。この地域も、大銭が存在することに特徴がある。出土銭貨の枚数は32枚と少ないものの、その内14枚43.75%が大銭であった。

これらの出土銭がもたらされたルートを考えるなら、大銭の多い地域である沿海州などが想定でき、その地域よりさらに大銭の出現率が高いことから、大銭が選択的に選ばれた可能性を指摘できよう。

サハリンに大銭が多い理由は、銭貨が貨幣ではなく装飾品として利用されたため、大型のものが好まれたものと考えられる。サハリンで発見された銭貨では、13枚に孔が開けられており、服に縫い付けるなどして装飾に用いたと考えられる。つまりサハリンでは、銭貨は経済外的使用が主流であったと言えよう。

### ④ 中国本土の影響下における共通性

以上、モンゴル、沿海州、サハリンで発見される銭貨の特徴を抽出した。これらの地域に共通する特徴をまとめるなら、「大銭が多く見られる」となろう。

モンゴルや沿海州では、銭貨は都市や土城から発見される事例が多く、当地に居住している官吏や兵士、商人や工人を含む市民などが貨幣として使用したのと考えられる。またこれらの地域は中国本土と隣接していることから、独自の銭貨流通圏を形成したとは考えにくい。このことから、モンゴルや沿海州で流通している銭貨は、多くの場合中国からの物品への決済などに使われ、中国本土に還流することを前提としていたと考えられる。そのため、この地域ではある程度の貨幣流通量はあるものの、一括出土銭のように蓄財を目的として地中に埋めるほどの量はなく、多くは中国本土へ環流したものと推測される。

これらの地域で、中国の一括出土銭に比べ大銭が高い割合で含まれている理

由は、大銭が環流しにくかったためと考えられる。前述のように大銭は価値が下落しやすく、決済通貨としての脆弱性を持っている。そのため、銭貨流通の中心地である中国本土では自然と忌避され、周辺地域に押し出されてきた可能性が考えられる。そして一度周辺地域にもたらされた大銭は、決済に際して小平銭よりも好まれず、これらの地域に滞留する。これが出土する割合が高い理由ではないだろうか<sup>21)</sup>。

また大銭は、さらに縁辺部のサハリンなどでは装飾としての需要があり、より大型の銭貨が好まれたことも、この地域に大銭が多く出土する理由の一つとも考えられる。サマーリンによればサハリンだけでなく、アムール河上流域のウラジミーフカ文化の遺跡でも穿孔のある貨幣が発見されており、両者の間に交流があったことを物語るものだという（サマーリン 2008: 60）。このような装飾品としての需要が辺縁部に広く存在したことを示唆するものと言えよう。

#### 4. 東ユーラシアにおける銭貨流通モデル

##### 1) 考古資料としての出土銭

###### ① 用途

ここまで、第2章では東ユーラシア各地で発見される出土銭の事例を概観し、第3章ではそれら流通する銭貨の特徴を、一括出土銭の見られる地域と個別出土銭のみ発見される地域に分けて抽出した。これらの分析をもとに、本章では考古資料として各地で発見される出土銭が、どのような経路に従って流通し、埋められたのかについて、その用途や出土する遺跡・遺構を確認し、考古資料としての性格を明確にしたい。

まず出土銭の用途についてであるが、銭貨として鑄造されたものである以上、第一に貨幣として、経済活動に用いられたことは間違いない。銭貨の場合、銅銭か鉄銭かに関わらず、市場取引での決済手段としての用途が、最も重要な機能と考えることができよう。さらに流通量が潤沢であり、また自立した独自の流通圏を形成している中心部では、価値保存を目的とした備蓄の手段としても機能した。これが何らかの理由により地中に埋められたまま掘り出されなかつ



たものが、一括出土銭として発見されるのである<sup>22)</sup>。

また地中から出土する銭貨は、上記のような経済的用途だけでなく、経済外的な用途で用いられたものがある点も、注意する必要があるだろう。例えば墓に副葬品としておさめられる銭貨は瘞銭と呼ばれ、地域時代を問わず普遍的に存在する。そのほか災いを祓う、福を呼び込むなどの目的で作られるものを厭勝銭と呼ぶが、この機能を流通銭貨に求める場合も多い。さらに装飾品として衣服や首飾り、あるいは道具の装飾などに銭貨を用いることも、非常に普遍的に見られる行為である。こうした経済外的用途に用いられる銭貨も、個別出土銭には多く見られる。これらは貨幣として流通している地域で発見されることはもちろん、サハリンなど貨幣経済が及んでいない地域にまで、広く分布する（三宅2013）。

## ② 遺跡・遺構

では、銭貨が発見される遺跡・遺構にはどのようなものがあるのだろうか。まず、大量の銭貨がまとまって発見される、一括出土銭があげられよう。一括出土銭は工事などでの不時発見がほとんどであり、その性格まで把握することは難しいが、流通銭貨を何らかの原因で地中に埋めたものと考えられる。

また都市・土城など、多くの人が生活していた遺跡では、かなり普遍的に銭貨が出土する。住居や寺院あるいは宮殿など、建築遺構に伴って出土することも多い一方、溝や土坑、包含層などからも非常によく発見される。これらは個別出土銭として単体で発見されることが多く、具体的な用途は分からないことが普通である。また時期を特定することも困難な資料も多いため、一定の時間幅の中で使用期間をとらえることが必要となる。しかしそれらも、多くの場合は貨幣として使用されたものであると考えられ、遺失などにより遺跡中に残されたものであろう。

小規模の集落の住居などからも銭貨が発見されることがある。またしばしば貨幣流通圏とは考えにくいアムール川流域など、辺境の集落の住居からも、発見されることがある。これらは貨幣として認識されていたものか、貨幣外の用途として持ち込まれたものか、判断が難しい事例も多い（栞本1995）。

経済外的用途として銭貨が出土する場合、もっとも多いのは墓である。中国本土はもとより、その周辺地域においても銭貨を副葬する行為は広く確認でき、宗教・習慣に関わらず埋葬儀礼の一環として銭貨が副葬されている。また貨幣としての流通が考えにくい地域でも確認できる（柘本1995:29）。副葬品として選択されたか、あるいは装飾品として副葬品につけられたものであろう。

このように、考古資料としての出土銭には、貨幣として経済活動で使用されたものはもちろん、瘞銭や厭勝銭、装飾品など経済外的用途で用いられた銭貨も含まれる。またそれらが出土する遺跡・遺構も多種多様であることを確認した。ではこれらの出土銭を、東ユーラシアの銭貨流通の中に、どのように位置づければ良いのであろうか。これまでの検討をもとに、銭貨流通圏を形成し、時にはその外側へ拡散していく、銭貨の動きをモデル化してみたい。

## 2) モデル化の試み

### ① これまでのモデル

筆者はかつて、東アジアにおける銭貨流通のモデル化を、「銭貨流通量」と「決済手段としての認識」をキーワードに試みたことがある（三宅2005a:152-155）。その際に、銭貨の流通量の多寡と貨幣としての認識の強弱をもとに、一括出土銭が発見されるか、土城、都市で大量に発見されるかなど、出土状況の要素に従って階層構造として理解し、中心から周辺、辺縁に向けて同心円状に、銭貨が要素に応じて広がるモデルを考えた。

この基本的な概念は現在も有効と考えるが、その後ベトナムやインドネシア、北東アジア地域での調査を進めるに従い、もう少し複雑な様相を示すことが明らかとなってきた。ここでは以前のモデルをもとに、さらに深化した形でのモデル化を試みたい。

### ② 地域設定の再検討

新しいモデルでも旧モデル同様、銭貨流通量の多さや決済手段としての認識を基準として、同心円状に銭貨が中心－周辺－辺縁へと要素を減少させながら分布する構造は変わらない。しかし周辺部での調査を進めると、地域によって

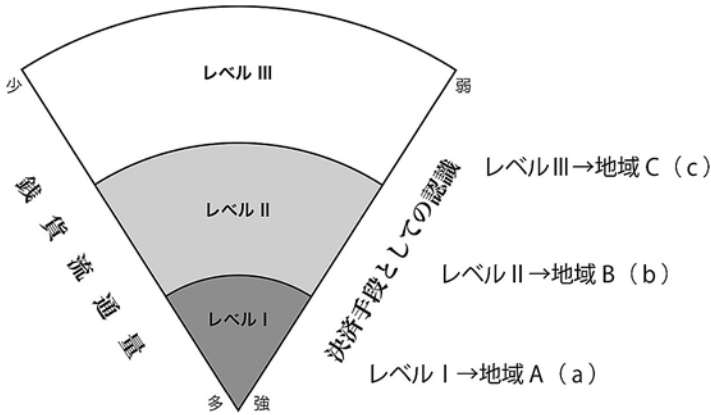


図5 これまでの銭貨流通モデルと新たな地域区分

流通している銭貨の特徴が異なることが明らかとなり、同心円状の銭貨流通構造が複数存在すると理解した方が、より実態を整合的に説明できると考えるようになった。

それに伴い、銭貨流通を階層構造（レベルⅠ，レベルⅡ，レベルⅢ）にとらえるよりも、要素を減少させながらも地域的な特徴も保持している点を考慮し、地域 A (a)，地域 B (b)，地域 C (c) と呼び換えることとしたい。これにより複数の中心がある構造が、互いに独自の銭貨流通圏を形成しながら、さらにその周辺や辺縁地域では、同心円構造が重複している状況が明確に把握できるようになると考える（図5）。

### ③ 東ユーラシアにおける銭貨流通モデル

では具体的な地域設定を行ってみよう（図6，表1）。まず、東ユーラシアにおける銭貨流通の中心地である中国本土に、地域 A を設定する。この地域が東ユーラシアに流通する銭貨の多くを鑄造しており、貨幣経済の根幹を銭貨が担っていた地域といえる。この地域の中心は北宋，南宋であるが、北方の異民族王朝の遼，金，西夏も第1章で概観した通り，宋銭を主体とした貨幣経済を形成している。

ただ、この中国本土の地域 A は、いわゆる単一の経済圏を形作っていたわ

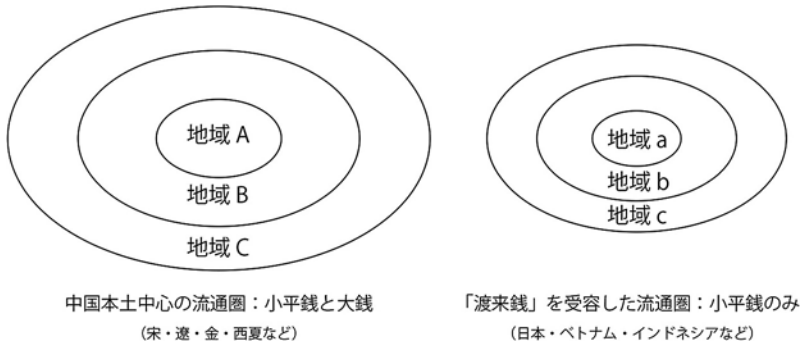


図6 東ユーラシアの銭貨流通モデル

表1 地域区分ごとの考古資料の要素と用途

用途	経済的用途（決済手段）			経済外的用途（決済手段ではない）		
	一括出土銭	都市・土城	副葬品	厭勝銭	装飾品	住居
地域 A (a)	○	○	○	○	○	○
地域 B (b)	×	○	○	○	○	○
地域 C (c)	×	×	○	○	○	△

○普遍的に見られる △発見されることがあるが多くない ×ない

けではない。宋は基本的にこれら異民族王朝の国々には銅銭の輸出を禁じていた。しかし、考古資料の検討からは、両者はきわめてよく似た銭種組成を示していることから、結果的には大量の銅銭が異民族王朝へ流出したものと考えられる<sup>23)</sup>。

この地域 A を規定する考古資料は一括出土銭である。この地域はもっとも貨幣経済が発達しており、流通量ももっとも多かったと考えられる。銅銭は、地中に埋めて秘匿する価値を有する貨幣として機能していた。またこの地域は都市や住居、そのほかの建築遺構からも銭貨が出土するだけでなく、副葬品、厭勝銭、装飾品として使用されることもあった。もっとも広汎に銭貨が使用された地域といえよう。またその銭種は鉄銭と銅銭であり、大銭も一定程度使用されていた地域と規定できる。

次に、地域 A の周辺に位置する地域には地域 B が設定できる。この地域は地域 A から直接銭貨の供給を受け、同時にその影響下に置かれていた地域と

いえる。具体的にはモンゴル、沿海州がこの地域 B に相当する。この地域では土城や都市などで銭貨は貨幣として盛んに使用されるが、自立した貨幣経済は営まれず、隣接する地域 A から銭貨のみならず商品の供給も受けている。

この地域で銭貨が多く出土する土城や都市には、中国本土から赴任した軍や官吏などが駐屯しており、それに付随して商人や工人もある程度住んでいたと考えられる。銭貨は中国本土である地域 A から持ち込まれる物資などの決済に使用され、多くは地域 A に環流したと考えられる。そのためこの地域で独自に必要とされる銭貨の量は必ずしも多くはなく、一括出土銭のように地中に埋めるほどの需要はなかったものと推測される。

また地域 B は土城や都市の外側には遊牧や狩猟採集を生業とする人々が生活する空間が広がっている。彼らは普段の生活では銭貨を必要とはしないが、生活に必要な物資（たとえば布や茶など）を入手するために、銭貨が必要な場合が定期的に生じていたと思われる。その際には、彼らは土城や都市の市場へ換金可能な物品（家畜や毛皮などであろう）を持ち寄り、換金したのち求める物資を購入したと考えられる。そのため、彼らが銭貨を大量に持ち帰ることがあったとは考えにくい。

この地域 B の考古資料としての特徴は、「一括出土銭がない」という点である。しかし、一括出土銭以外の要素はすべてそろっている。また銭種は広域で授受される銅銭であり、大銭が高い割合で含まれていることも特徴と言えよう。これは第 3 章で検討したとおり、大銭の価値が安定しない状況下では決済の際に忌避されやすく、中国本土へ環流しにくい状況があったのではないかと考えられる。

地域 B のさらに外側の辺縁には地域 C が設定できる。この地域は地域 B から銭貨を入手していたが、経済的用途はほとんど消失しており、決済手段としての認識は希薄であったと考えられる。その一方で、装飾品などの経済外的用途が強まり、墓から出土する事例も確認できる。本論で検討した地域では、サハリンがこの地域に相当する。また柘本哲の研究によれば、ロシア領内のアムール川流域でも住居や墓から銭貨が少量出土する（柘本 1995: 26-29）。地域 C に属すると考えてよい。

この地域Cの考古資料としての特徴は、装飾品や副葬品など「経済外的用途」に使用されたものが多い点であろう。サハリンの事例で検討したとおり、銭貨に孔が開けられているものがあり、服などに縫い付けて装飾に使用したものと考えられる。このような銭貨は、再び決済に使われる可能性はかなり低く、貨幣としての機能はほぼ失っているものと言えよう。

これら中国本土を中心とする「中心－周辺－辺縁」を大文字の「地域A－地域B－地域C」と呼びたい。この地域は小平銭だけでなく「大銭も流通していた」という点が特徴である。

これに対し、日本、ベトナム、インドネシアなど、中国の銭貨を「渡来銭」として受け入れ、独自の銭貨流通圏を形成した地域を、小文字の「地域a－地域b－地域c」と呼びたい。これらの地域は個別に中国銭を受容しており、日本の本州を中心とする地域、ハノイを中心とするベトナム北部、東部を中心とするジャワ島に、それぞれ地域aが設定される。そしてそれぞれの地域で、同心円状に「中心－周辺－辺縁」つまり「地域a－地域b－地域c」を形成している。

その考古資料としての用途や出土状況は「地域A－地域B－地域C」の基準とほぼおなじである。そしてこの地域に共通する特徴は、これまで検討してきたように「銅の小平銭」のみが流通していた点である<sup>(24)</sup>。この「地域a－地域b－地域c」の中心である日本、ベトナム、インドネシアの三者は互いに無関係であり、独自に中国銭を受容した。しかしその特徴は、驚くほど共通している。これは中国銭を受け入れる際に、共通のメカニズムが働いたことを示唆している。

これらの地域区分は、もちろん明確に線引きできるものではない。区分を特徴づける要素は緩やかに変化する、あるいはモザイク状に点在しながら、大筋ではこの区分のように変化していくものと捉えたい。

### 3) 北東アジアの事例との対比

#### ① 銭貨流通モデルの有用性

前項にて、東ユーラシアにおける銭貨流通モデルの設定を行った。実はこの

「地域 A—地域 B—地域 C」と「地域 a—地域 b—地域 c」は、決して独立した系ではなく、*辺縁部*や一部の*周辺部*では、互いに重複する関係にある。

このモデルの有用性は、実際に遺跡から発見される銭貨を、東ユーラシアの銭貨流通の中に位置づけられることだと考える。そのため、系が重複した地域で出土する銭貨の流通圏への位置づけに、役立つことが期待される。ここでは試みに、北東アジアと北海道の出土銭の事例を、実際にこの流通モデルに当てはめてみたい。

## ② 地域 a—地域 b—地域 c (日本) と北東アジアの関係

まず、北海道の事例を概観する。ここでは北海道の中世出土銭を集成した鈴木信の研究を参照する(鈴木 2003)。まず本州の銭貨流通がおよんでいた道南では、志海苔古銭をはじめとして一括出土銭が発見されており、この地域は地域 a に属する。道央では銭貨の出土量が多い大川遺跡、末広遺跡、美々 8 遺跡などがある。これらの遺跡は和人の痕跡が濃厚な海上交通、河川交通・交易の要衝であるという。地域 b に属すると言えよう。そしてチャシや送り場などアイヌの残した遺跡からも少量の銭貨が出土し、それは道東や道北へも広がりを見せる。銭貨の利用が祭祀などと関連し、貨幣としての認識が希薄になることから、地域 c に属すると言えよう(図 7)。

では、北海道の大銭に注目するとどうなるであろうか。一括出土銭に含まれる大銭は、志海苔古銭の事例のように、小平銭の大きさに削られて流通しており、本州の銭貨流通圏に属する地域 a の事例と言える。ところが一方で、余市町大川遺跡では泰和重寶、稚内市オンコロマナイ 2 遺跡では熙寧重寶、上ノ国町勝山館跡では崇寧重寶の大銭が発見され、それらはみな元の大きさのまま出土する。その上、泰和重寶と崇寧重寶には穿孔も見られた(三宅 2013: 78-79)。これらの特徴はサハリンの銭貨と一致している。よってこれらの大銭は、本州の銭貨流通圏である地域 a ではなく、中国本土の*辺縁部*であるサハリンからもたらされたものである。つまり北海道は、地域 C にも属しているのである。

同時にサハリンでは、前述のとおり 1 枚であるが、永樂通寶の出土が報告されている(サマーリン 2008: 75)。永樂通寶は中国本土を中心とする地域 A、地



図7 北海道における出土銭の地域区分

域Bでは発見されない銭貨である。一方、日本をはじめとする地域a—地域b—地域cでは普遍的に存在する銭貨であり、日本からもたらされた可能性がある。このことは、サハリンは地域Cであると同時に、地域cにも属していることを示していよう。

### ③ 北東アジアの銭貨流通モデル

上記で検討した北東アジアと北海道の考古事例を、銭貨流通モデルに当てはめるなら図8のようになるであろう。モンゴルや沿海州は地域Bに、アムール川流域からサハリンは地域Cに属するが、サハリンは同時に地域cとも重複している。また北海道は基本的には本州の銭貨流通圏に属し、道南は地域a、道央は地域b、道東と道北は地域cに対応するが、同時にサハリンからの銭貨流入により地域Cとも重複する。

このように、銭貨流通モデルを構築することで、遺跡から出土する銭貨を東ユーラシアの銭貨流通に位置づけて評価することが可能になると考える。この



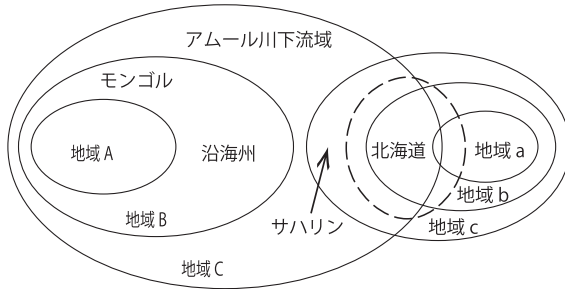


図8 北東アジアの銭貨流通モデル

モデルは試論の段階である。今回検討した北東アジア地域だけでなく、その他の地域でもその有用性を検討していきたい。

## おわりに

本論考では、東ユーラシアにおける銭貨流通を、考古資料を用いた各地域の比較によりその実態に迫った。まず第1章で研究の範囲と目的を示し、本論考の目的を10世紀から15世紀の東ユーラシアにおける中国銭の動態を解明し、モデル化を試み、出土銭を銭貨流通の流れに位置づけることとした。

続いて第2章では出土銭の事例を概観した。一括出土銭では、まず中国から始め、日本、ベトナム、インドネシアの事例を確認した。これにより、中国本土の各王朝では銭種組成が似通っており、北宋銭を主体として流通していること、日本、ベトナム、インドネシアでも、銭種組成が中国と近いことが明らかとなった。個別出土銭では、モンゴル、沿海州、サハリンの事例を取り上げ、その概要を把握した。個別出土銭は数量が必ずしも多くはないが、大銭の割合が高いことなどの特徴が示された。

これを受け、第3章では流通する銭貨の特徴を分析し、合わせて異なる地域に共通する特徴を見いだした。具体的には、中国本土とモンゴル、沿海州、サハリンには「小平銭と大銭」が、日本、ベトナム、インドネシアでは「銅の小平銭」が流通していたことを明かにした。

この銭貨流通の特徴から、第4章では東ユーラシアにおける銭貨流通モデルの構築を試みた。このモデルの構造は次のようになる。まず中国本土を中心に小平銭と大銭が流通する「地域 A—地域 B—地域 C」という同心円状の流通圏を設定する。そしてそれ以外の地域に、銅の小平銭が流通する日本、ベトナム、インドネシアをそれぞれ中心に持つ「地域 a—地域 b—地域 c」の流通圏を配置する。同時に両者は一部が重複して存在する、という構造をしたモデルである。その具体的な事例として、北海道を含む北東アジア地域の出土銭をモデルに当てはめて検討した。

これら一連の分析と検討に基づいたモデルを構築することにより、各地で個別に研究されていた出土銭が、東ユーラシアという枠組みの中に位置づけて理解することが可能になると期待される。この流通モデルはまだ試論の段階であり、今後さらに各地の事例を検討して精度を高めてゆきたい。そして最終的には「東ユーラシアにおける貨幣考古学」確立に向けた基礎的概念となることを目指したい。

## 註

- (1) ユーラシア大陸の東部地域を指すことばには、「東ユーラシア」だけでなく「東部ユーラシア」、「ユーラシア東部」など様々ある。上田信は東ユーラシアという空間を定義する際に、元代以降の中国銅銭が海外へ大量に輸出される状況を、「銀流通システムが元朝の政策に支えられてコア・システムとして維持され、その周辺ではそれぞれ銅銭を使用する経済圏がサブ・システムとして生成」してきたことに注目する（上田 2005：48-50）。上田が想定する東ユーラシアが、本論考で言及する範囲に近いので、この語を用いる。
- (2) 中国から周辺地域へ、いつ頃から銭貨が流出し始めるのかについては、多くの議論がある。1215年以降の金の交鈔発行と銅銭行使の禁止に画期を求める、大田由紀夫の研究に従えば元による南宋の滅亡以前に、大量の銭貨が日本へもたらされたと考えられよう（大田 1995：27-29）。しかし鈴木公雄の研究によれば、考古資料としての一括出土銭は、日本では最新銭を南宋末の銭貨とするものが最古の1期に相当すると認識されていることから（鈴木 1999：63-66）、ここでは銭貨が本格的に国外へ流出する時期は元代以降としておきたい。
- (3) 大量に発見される銭貨について、日本では「埋納銭」や「備蓄銭」など、様々な呼称が用いられ、統一をみていない。「埋納」や「備蓄」という語の問題点は、

地中に埋められた理由を含んでいるため、研究者の見解が呼び方に反映されてしまうことにある。現在まで、埋められた原因に統一的な見解はなく、埋納か備蓄かで対立している状況である（橋口 1999, 峰岸 1999）。これに対し櫻木晋一は考古学の立場から、出土状況のみに着目した「一括出土銭」という呼称を用いるよう提唱している（櫻木 2009: 22-23）。本論考ではこの櫻木の呼称に従う。

- (4) 一括出土銭に含まれる銭貨について、「流通銭貨そのものではなく選別された銭貨である可能性が高い」とする議論があり（櫻木 2016: 16-17）、後述の個別出土銭との比較が必要となる。しかし、本論考であつかうような素材の違い（銅・鉄）や、大銭の有無などは一括出土銭においても相当程度反映されており、一括出土銭資料でも十分に分析可能であると考ええる。
- (5) 2005 年以降も、少ないながら事例は報告されている。しかし、銭種組成などの基本的傾向は変わらないため、ここでは 2005 年までに集成した事例で議論を進め、必要に応じて 2005 年以降の事例にも触れる。
- (6) 三宅 2005a では西夏の一括出土銭は 12 例と報告している。その後、新たな事例の報告があり、稿をあらためて鉄銭の一括出土銭を検討した（三宅 2005b）。ここでは新しく集成したものを使用している。
- (7) このほか、ごく少量の銅銭が混入していた事例が数例ある。
- (8) 鉄銭の一括出土銭の銭種組成は、各王朝および国内各地で、明確な差異が存在している。これは歴史的背景として、鉄銭行使地域が設定され流通銭貨が相当程度管理されていたことに起因していると考えられる（三宅 2005b）。本論考では東ユーラシア各地との流通銭貨の比較を目的としているため、鉄銭は扱わず銅銭のみを分析対象としたい。
- (9) 南宋で鑄造された銭貨の割合が反映されていないが、これは一括出土銭の事例報告に偏りがあるためで、種類と枚数を報告しているものが南宋初期に限られていたことに原因がある。南宋末期の事例で正確な情報が提示されていれば、南宋銭も一定の割合を占めると考えられる。それは後述する元の一括出土銭の事例に、南宋銭が 20% ほど含まれていることから推測できる。
- (10) 唐から五代十国における一括出土銭の銭種組成を分析すると、96.37% が開元通寶で占められていた（三宅 2005a: 7-12）。これは北宋が成立するまで、中国で流通していた銭貨は、開元通寶が主体であったことを示している。
- (11) 鈴木公雄は大量に埋められた銭貨を「備蓄銭」と呼んでいるが、ここでは一括出土銭で統一する。
- (12) 櫻木晋一によれば、2010 年以降に限っても年間 2 例ほどの割合で一括出土銭は発見されており、事例はもっと増加していると考えられる（櫻木 2016: 15-16）。しかし、銭種組成などの基本的な傾向は、鈴木公雄の集成から十分に検討可能であるため、ここでは鈴木の集成をもとに分析する。以下の日本の一括出土銭に関する記述は、特に断らない限り鈴木 1999 を参照している。

- (13) 永楽通寶は、日本では大量に発見されているものの、中国では一括出土銭にはほぼ含まれていない(三宅 2007)。これは大きな課題であるが、本論考では紙幅の都合により検討できなかった。別の機会に改めて検討したい。
- (14) 日本への銅銭流入に関しては、前述の通り南宋並行期には相当程度もたらされていたと考えられよう(大田 1995: 27-29)。しかし、一括出土銭がつくられるためには、地中に銭貨を埋めたとしても流通に影響を与えないほど大量の銭貨が必要となり、中国からの輸入の時間差を考慮するなら、一括出土銭がつくれ始める時期は、流入の開始時期より下るものと考えられる。またそれだけ大量の銭貨がもたらされるためには、中国側の使用貨幣の変化も勘案する必要があり、中国で紙幣が本格的に発行される元以降に、日本に銭貨がもたらされたと考えておきたい。
- (15) 図3を詳細に観察すると、日本では皇宋通寶がもっとも多く出土し、中国では元豊通寶がもっとも多いという違いが見てとれる。この点について井上正夫は、日本では折二銭(大銭)を好まないという慣行を考えれば、元豊通寶に含まれる大銭が排除されたため、相対的に皇宋通寶の方が多く流通したと考えている(井上正 2009: 41)。
- (16) カラコルムの出土銭に関しては、現在整理作業を行っており、近日中に図録が刊行される予定である。ここでは大まかな概要を述べるに止める。
- (17) 報告(市立函館博物館 1973)では、「小平銭を小さくしたものと折二銭など大きいものを小平銭と同じ大きさにしたもの」の2種類があると指摘している。ここで注目すべきは大銭の周囲を削って小平銭と同じ大きさにしたものである。図版を見る限り、かなり多くの大銭で周囲を削った事例を確認でき、大銭を流通させるためのこうした加工は普遍的に行われていたことを示唆する。
- (18) 100枚の小平銭をその数どおり100文として数えることを「足陌」といい、100枚より少ないにもかかわらず100文と見なして計算するものを「短陌」という。宮澤知之によれば宋代の中国では76以下の短陌を見いだすことができないという(宮澤 2007: 214-215)。このことから67陌という事例はベトナム独自のものであることが分かる。
- (19) 67文の短陌慣行については、井上泰也によると14世紀の元末・汪大淵の『島夷誌略』交趾の条に「流通使用の銅銭は、民間では六七銭を以て中統銀一両に換算」という記述があるという(井上泰 2009: 49)。
- (20) ただし、マジヤパヒト王国の首都であるトロウラン遺跡の出土遺物を管理する、東部ジャワ文化財管理事務所に収蔵されている銭貨資料を見学した際には、大銭や大型の厭勝銭なども確認できた。この点から、マジヤパヒトでは流通していた中国の銅銭は、必ずしも小平銭のみではない可能性もある。今後の調査研究の進展を待ちたい。
- (21) 黒田明伸は、都市部から地方の市場町へ運ばれ、さらに農村の定期市へ下向する

通貨は、農村市場から上向するときには額面の小さいものほど上向しにくい、としている。その理由のひとつに上位の市場ほど零細額面通貨の需要が低いこと、運搬する費用は高額面のそれに比べて高いこと、をあげる（黒田 2014: 7-8）。黒田の意見は、少額通貨と高額通貨が同様に受領されることを前提とすればその通りであろう。本論の大銭の場合は、受領が忌避される可能性があるため、周辺部に滞留するものと考ええる。しかし、上位の市場として受領する側（中国本土）に需要の偏り（忌避）が存在している点では、黒田の述べる「還らない貨幣」の一形態と言えるであろう。

- (22) 一括出土銭が埋められる理由については註 (3) でふれたとおり、日本では備蓄説と埋納説の論争が続いている。筆者は中国の一括出土銭を検討した結果、王朝末期に多く作られること、国境など紛争の多い地域に分布していること、などから社会不安の増大を背景として緊急避難的に地中に埋められたものが多いと考えている。ほかに銅銭の流通を禁止する法令なども、その契機になることがある（三宅 2005a: 65-82）。
- (23) 井上正夫は、遼国内で流通した銅銭についてはほとんどが中国銭であり、遼国内へは「密貿易」により持ち込まれたとする。そして北方の諸産品として塩と馬の例をあげ、それらの代価として遼の商人へと支払われ、遼に流入したと述べる（井上 1996: 4-5）。
- (24) もう 1 点特徴をあげるなら、「永楽通寶が発見される地域」ということである。これは今回扱っている宋銭を中心とした時期では、もっとも新しい事例のみに有効な特徴であるため、すべてに当てはまるわけではない。しかし、中国やモンゴル、沿海州では出土しない永楽通寶が、日本、ベトナム、インドネシアでは普遍的に出土する点は、注意すべきであろう。

## 参考文献

- 青山 亨 2001a 「東ジャワの統一王権」池端雪浦他編『岩波講座 東南アジア史』（第 2 巻 東南アジア古代国家の成立と展開），141-167 頁，岩波書店，東京
- 青山 亨 2001b 「シンガサリ=マジャパヒト王国」池端雪浦他編『岩波講座 東南アジア史』（第 2 巻 東南アジア古代国家の成立と展開），197-230 頁，岩波書店，東京
- 井上正夫 1996 「遼北宋間の通貨問題」『文明のクロスロード Museum Kyushu』第 14 巻第 1 号（通巻 51 号），3-10 頁，博物館等建設推進九州会議，福岡
- 井上正夫 2009 「国際通貨としての宋銭」伊原弘編『宋銭の世界』，29-45 頁，勉誠出版，東京
- 井上泰也 2009 「宋代貨幣システムの継ぎ目 —— 短陌慣行論」伊原弘編『宋銭の世界』，46-63 頁，勉誠出版，東京

- 上田 信 2005 『海と帝国 明清時代』(中国の歴史09), 講談社, 東京
- 大田由紀夫 1995 「一二—一五世紀初頭東アジアにおける銅銭の流布——日本・中国を中心として——」『社会経済史学』第61巻第2号, 20-48頁, 社会経済史学会, 東京
- 大田由紀夫 1997 「一五・一六世紀中国における銭貨流通」『名古屋大学東洋史研究報告』21, 1-28頁, 名古屋大学東洋史研究会, 愛知
- 菊池誠一 2012 「一括出土銭の容器の編年的位置づけ」菊池誠一他編『ベトナム北部の一括出土銭の調査研究2』昭和女子大学国際文化研究所紀要 Vol.16, 148-150頁, 昭和女子大学国際文化研究所, 東京
- 黒田明伸 2014 「貨幣の非対称性」『貨幣システムの世界史増補新版——〈非対称性〉をよむ』(世界歴史選書), 1-16頁, 岩波書店, 東京
- 坂詰秀一編 1986 『出土渡来銭——中世——』(考古学ライブラリー45), ニューサイエンス社, 東京
- 櫻木晋一 1992 「北九州市八幡西区本城出土の備蓄銭」『古文化談叢』第27集, 3-41頁, 九州古文化研究会, 福岡
- 櫻木晋一 2009 『貨幣考古学序説』, 慶應義塾大学出版会, 東京
- 櫻木晋一 2016 『貨幣考古学の世界』(考古調査ハンドブック15), ニューサイエンス社, 東京
- サマーリン 2008 (イーゴリ=A. =サマーリン) 「中国銭貨を探る——中世・近世におけるサハリン・大陸間交流史研究——(故 N. V. イヴォーチキナ氏に捧ぐ)」垣内あと訳『出土銭貨』第28号, 57-76頁, 出土銭貨研究会, 下関
- 嶋谷和彦 2006 「中世日本における大銭の出土状況」小野正敏編『前近代の東アジア海域における唐物と南蛮物の交易とその意義』平成14年度~平成17年度科学研究費補助金(基盤研究(A)(2))研究成果報告書, 47-56頁, 国立歴史民俗博物館, 千葉
- 市立函館博物館 1973 『函館志海苔古銭』, 市立函館博物館友会の会, 函館
- 鈴木公雄 1999 『出土銭貨の研究』, 東京大学出版会, 東京
- 鈴木 信 2003 「北海道の中世出土銭——付論 擦文・オホーツク文化期の出土銭——」『出土銭貨』第19号, 9-54頁, 出土銭貨研究会, 堺
- 中島圭一 1999 「日本の中世貨幣と国家」歴史学研究会編『越境する貨幣』(シリーズ歴史学の現在1), 109-139頁, 青木書店, 東京
- 橋口定志 1999 「銭を埋めること——埋納銭をめぐる諸問題——」歴史学研究会編『越境する貨幣』(シリーズ歴史学の現在1), 211-245頁, 青木書店, 東京
- 枅本哲 1995 「北アジア出土の銭貨」『出土銭貨』第3号, 10-35頁, 出土銭貨研究会, 大阪
- 峰岸純夫 1999 「中世の「埋蔵銭」についての覚書——財産の危機管理の視点から——」歴史学研究会編『越境する貨幣』(シリーズ歴史学の現在1), 247-266

- 頁, 青木書店, 東京
- 三宅俊彦 2005a 『中国の埋められた銭貨』(世界の考古学シリーズ 12), 同成社, 東京
- 三宅俊彦 2005b 「10-13世紀の東アジアにおける鉄銭の流通」『日本考古学』第20号, 93-110頁, 有限責任中間法人日本考古学協会, 東京
- 三宅俊彦 2007 「中国における永楽通寶の出土事例 —— 窖藏銭を中心として ——」『出土銭貨』第26号, 102-114頁, 出土銭貨研究会, 山口
- 三宅俊彦・アレクサンドール=L. イーヴリエフ 2008 「北東アジアの銭貨流通 —— 金代を中心に ——」菊池俊彦・中村和之編『中世の北東アジアとアイヌ』, 197-222頁, 高志書院, 東京
- 三宅俊彦 2013 「サハリン出土の銭貨」『環オホーツク海地域における前近代交易網の発達と諸民族形成史の研究』北海道大学総合博物館研究報告第6号, 66-85頁, 北海道大学総合博物館, 札幌
- 三宅俊彦 2014a 「ベトナム北部の銭貨流通」高濱秀先生退職記念論文集編集委員会(編)『ユーラシアの考古学 高濱秀先生退職記念論文集』, 263-282頁, 六一書房, 東京
- 三宅俊彦 2014b 「インドネシアの出土銭調査」『東南アジアにおける出土銭貨の考古学的研究 2014年度研究会(予稿集)』, 17-22頁, 淑徳大学人文学部歴史学科, 東京
- 三宅俊彦 2015 「出土銭からみたモンゴル社会」白石典之編『チンギス・カンとその時代』, 86-102頁, 勉誠出版, 東京
- 宮澤知之 2007 『中国銅銭の世界 銭貨から経済史へ』(佛敎大学鷹陵文化叢書 16), 思文閣出版, 京都
- 桃木至朗 2001 「『ベトナム史』の確立」池端雪浦他編『岩波講座 東南アジア史』(第2巻 東南アジア古代国家の成立と展開), 171-196頁, 岩波書店, 東京
- 陳 琿 1988 「杭州中河治理工程発現的宋代窖藏銅銭清理報告」『中国銭幣』1988年第2期, 56, 61-67頁, 北京
- 馬 林 1994 「河北省順平県発現金代窖藏銭幣」『文物春秋』1994年第4期, 26-27頁, 石家荘
- Bermann, J. et al. 2010 *Mongolian-German Karakorum Expedition*. Volume 1, Reichert Verlag, Wiesbaden
- Kiselev, S. V. et al. (Киселев, С. В. и т. д.) 1965 *Древнемонгольские города*, Академия Наук СССР. Институт Археологии, Москва
- Samarin, I. A. (Самарин И. А.) 2006 Китайские монеты Цянь как источник по изучению связей Сахалина с материком в эпоху средневековья и нового времени, *Вестник Сахалинского Музея*, No. 13, сс. 119-130, Сахалинский

областной краеведческий музей, Южно-Сахалинск

Samarin, I. A. (Самарин И. А.) 2011 Коллекция Китайских монет Цянь из Охинского района Сахалинской области, *Вестник Сахалинского Музея*, No. 18, сс. 160-174, Сахалинский областной краеведческий музей, Южно-Сахалинск

付記

本論考は、JSPS 科研費 JP16H03512, JP26284090, JP24520861, JP23320131, JP21520774, JP21401023, JP19520659, および平成 18~20 年度トヨタ財団研究助成, 平成 19, 20 年度財団法人高梨学術奨励基金の助成を受けて行われた研究の成果をまとめたものである。

また調査研究を進める上で、国内外の大変多くの方々にご多大なお力添えを賜った。一人一人のお名前をあげることはできないが、ここに感謝の意を表したい。



## COIN CIRCULATION IN EAST EURASIA FROM THE 10TH TO THE 15TH CENTURIES

MIYAKE Toshihiko

This study attempts to throw light on coin circulation in East Eurasia through a comparison of different areas using archeological artifacts. Section 1 shows the range and purpose of the research, explaining the actual circumstances of excavated coins in East Eurasia from the 10th to the 15th centuries, attempting to construct a model based on these features, and positioning the excavated coins in the larger flow of coin circulation.

Section 2 provides a general overview using examples of the excavated coins. In excavated coin hoards, examples of coins from China, as well as Japan, Vietnam and Indonesia were first examined. It is clear that in China proper under all dynasties, the composition of coin types was similar, coins from the Northern Song were the main types in circulation, and the composition of coin types in Japan, Vietnam and Indonesia was similar to that in China. In single finds, examples of coins from Mongolia, Primorskaya Oblast (the Russian maritime provinces) and Sakhalin were examined and a general understanding was obtained. Single finds were distinguished by a high proportion of large coins, though their number was not necessarily large.

On the basis of these findings, Section 3 analyzes the features of coin circulation and observes the special features common to different regions. It is clear that both small coins and large coins circulated in China proper, Mongolia, Primorskaya Oblast (the Russian maritime provinces) and Sakhalin, while small copper coins circulated in Japan, Vietnam and Indonesia.

From these features of coin circulation, Section 4 attempts to construct a model of coin circulation in East Eurasia. The structure of this model is as follows. First, we set up a circulation zone with concentric regions A, B and C centered on China proper in which small coins and large coins circulated. Next, for the other regions, we configured circulation zones composed of regions a, b and c centered respectively on Japan, Vietnam and Indonesia where small copper coins circulated. The structure of the model is such that part of both zones overlapped at the same time. As a test, coins excavated in the region of Northeast Asia, including Hokkaido, were examined in light of the model.

Using this circulation model, we hope to examine many examples and to

achieve increased precision. Finally, we also hope that it will become a basic concept for establishing “Numismatic Archaeology in East Eurasia.”

## **BOUNDARIES AND BANDITS : CHINESE TRANSBORDER ACTIVITIES AND QING-NGUYEN RELATIONS IN THE 19TH CENTURY**

MOCHIZUKI Naoto

During the second half of the 19th century, the Qing dynasty gradually strengthened its intervention into frontier areas and toward neighboring countries. This trend has been interpreted as a response to threatening Western countries and Japan in 1870s and 1880s, but the Chinese military intervention in Vietnam, which was later to become a crucial point of conflict with the French, was an exception conducted for the purpose of dealing with the growing insecurity in the Sino-Vietnamese border area from the late 1860s.

What then was the origin of the growing insecurity of Sino-Vietnamese border area? This paper thus examines the activities of Chinese bandits who straddled the Sino-Vietnamese border from 1820s to 1860s and attempts to pinpoint the origin of the anarchic situation in the border area.

In section 1, I explored the negotiations between the Qing dynasty and the Nguyen dynasty on the rebellion that broke out in 1828 and their impact. I note that the Nguyen dynasty refused a cross-border investigation by Qing officials, and as a result, the mastermind of the rebellion escaped arrest by the authorities, and the following year, another rebellion influenced by this case occurred.

In section 2, I address incidents of cross-border looting that were carried out from Tu Long 聚隆, a mining town in Vietnam, on the southern part of Yunnan province in 1851. In this case, Nguyen authorities who depended on Chinese mining shielded the marauders.

In section 3, I take up the “Huong Nghia Bang” 向義幫 that was re-formed by the Chinese bandits who had surrendered to the Nguyen dynasty in 1851. “Huong Nghia Bang” who maintained relations with anti-Qing rebels in Guangxi province, rose in rebellion within Vietnam in 1860s, and used the border to fend off attacks by the Nguyen’s troops sent to suppress them. Finally, the Nguyen dynasty, which had lost the power to suppress Chinese bandits, called for cross-border military intervention by the Qing.